養殖真珠の今昔を解説

「赤松先生の真珠講座」第2回講座

三重県真珠振興協議会（覚田譲治会長）は7月19日、三重県伊勢市岩渕1丁目の真珠会館で「赤松先生の真珠講座」第2回講座を開いた。元ミキモト真珠研究所所長で日本真珠振興会参与の赤松蔚（いぶき）氏（77）が養殖真珠について、歴史を紐解いた内容から現代まで続く問題まで、幅広い知識を余す所なく話した。

赤松氏は1924年に判決が出たパリ真珠裁判を紹介した際には「養殖真珠は本物だという判決を受けた歴史があるのだから、日本で真珠を扱う人はもっと胸を張ってほしい」と強調。同氏オリジナルの「人間の3S要素」を紹介した際には、御木本幸吉は精神（Spirit）、西川藤吉は技能（Skill）、見瀬辰平は感性（Sense）にそれぞれ優れていた大天才と評価し、受講者に「自分の3S要素を棚卸ししてみてほしい」と呼び掛けた。

約60枚のスライドを使用し、特許、論文などを写真や現物で紹介しながら講座を展開。「真珠の成因」については、涙説、夜露説、稲妻説、砂粒説、真珠袋説—などを順に仏像真珠などの写真を示しながら解説し、「人魚の涙」が起源とするロマンチックな説に対して御木本幸吉が「養殖真珠は人の涙です」と巧みに切り返した逸話なども紹介した。

養殖真珠について話す赤松氏（奥左）＝伊勢真珠会館で

半円真珠（ブリスター）養殖の試みについては、リンネの淡水産二枚貝を使った真珠、御木本が箕作佳吉に教えを請い1893年にアコヤ貝で成功し特許を取得した真珠などを紹介。真円真珠については、御木本（38式、全巻式）、見瀬辰平（核挿入針、誘導式）、西川藤吉（ピース式）の試みと発明に関する特許について、人物像なども交えながら解説した。

真円真珠が出来ると真珠養殖は一気に産業化し、琵琶湖で淡水真珠、フィリピンでシロチョウ真珠、沖縄でクロチョウ真珠の養殖が1910年代に相次いで始まった。赤松氏は「当時の日本人の気骨はすごい。政治情勢が悪かろうが、真珠のロマンに取り憑かれて世界中に出て行ってしまう」と評価。世界で日本にしかなかった養殖真珠が一気に花開き、広がった一方で、妬む人が出て来て裁判にまでなったが、西川藤吉の息子がオーストラリアで取得していた特許により、定説になりかけていた「イギリス人のサビル・ケントがオーストラリアで最初に成功した養殖技術を日本人が盗んだ」とする説を覆したことなどを紹介した。

最後に、真珠核の原貝の価格高騰に伴って近年問題となっているシャコ核、中国淡水二枚貝産核、貼合せ核なども写真で紹介。講義終了後は、前回と同様に受講者から次々に寄せられた質問にも一つ一つ丁寧に回答していた。

受講者からの質問に答える赤松氏＝伊勢真珠会館で